

新刊  
紹介

河野仁昭著

『村』

(文童社 A五版九九頁)  
一、五〇〇円

著者の河野氏は同志社社史史料編集所の事務主任で、『同志社百年史』刊行の総元締兼プロンプターの役割をはたしてきた人。現職につくまでに大学の文学部事務長、学生課長、大学会館事務室主任等の要職を歴任された。文学部では特講「日本文学近現代」で現代詩を講じている。

本書は河野さんの第四詩集である。「村」は河野さんの故郷である愛媛県の小村をさすのであるが、そこは一年に一度だけ著者が老いた両親に顔を見せに帰ったところであると同時に、いま全国に散在するところ

For some in ancient books delight;

Others prefer what moderns write:

Now I should be extremely loth

Not to be thought expert in both.

の、現代文明の都市の中で消えかかっている無数の小村をもさすのであって、この詩集はそれに対する鎮魂歌でもある。

望郷の念をおさえることのできない詩人は、冒頭の詩において「秋風が立つたら／この国の／捨てさられた村々を／訪れたい／朽ちかけた草屋の軒などに／ひとむらの葉鶏頭が／自生してはいないかと歌う。咲きもせず、開きもしないで、総身で炎のように燃えている葉鶏頭は、消えていった村々の、かつては生きていたことのしるしである。執念の炎だといってもよい。

故郷の村には都会に出ていった息子を待ちわびる老いた両親がいる。母親は戦争に行つてそれっきり帰つてこない息子の帰郷を今なお待っている。「――門口に だれやら立つとるが。――今度のバスで戻んてきよる。――お客さんがきたけん座蒲団だしてや。／話を通じんのじゃと兄貴はいう。三十三年だれを待ったか待つ思だけのおふくろの抜殻を ぼくはひそかに ぼくのなかで埋葬する。」村はその出身者にとってなつかしいところだが、しかしまた悲しくもおぞましい思

い出に満ちてもいる。山の子は里の子にじめられる。生垣の内から砂利がとんできて、山の子に当る。一緒に歩いてきた親にも当るが、当っても知らん顔で通りすぎていく。その歯がゆき。そして村には狂女も住んでいる。大阪に出ていって悪い病気をうつされて帰郷したが、大阪と村の区別がつかなくなつた女性である。

河野さんの心の中で村は生き続ける。詩人は田舎の本質を知っていて、ロマンティックにそれをべたほめしたり、逆にそれを嫌悪することもない。村に対する詩人の態度は切々たる哀惜の念であり、同時にそれは魂の再生のためのかけがえのない場所でもあるようだ。文明を代表する都市の生活が人間に与える心の傷をいやすのは、やはり村である。そして村びとの用いる方言を、村からきりはなすことは不可能である。

河野さんの雄渾で繊細な文体は、殊に「自分自身の村」をもつ読者には、これを自分の詩として、自分の心を読んでいるような印象を与えるのである。

北垣宗治(大学文学部教授)

J・ジェイコブズ

木村 俊夫 訳

中島 直子 訳

### イギリス民話集

I 『トム・ティット・トット』

II 『ヤラリーブラウン』

J・ジェイコブズ

木村 俊夫

山田 正章 訳

### ケルト民話集

I 『ディアドレ』

II 『アンドリュール・コフィー』

III 『ノックグラフトンの伝説』

東洋文化社 メルヘン文庫・新書版  
二七八頁・二八九頁・二一四頁・二  
一七頁・二〇八頁 I・II・I・II  
各四五〇円、III四八〇円

文学部の木村俊夫教授が被昇天女子短期大学の  
中島直子専任講師と同志社女子大学の山田正章  
助手との協力で訳出されたこれら五冊のイギリス  
およびケルト民話集は、「夢と冒険、幻想と怪奇」  
に富んだ物語を紹介しようとするシリーズ「メルヘン  
文庫」のなかで、とりわけ興味深いものであ

る。これらはたんに楽しい読みものであるばかりでなく、そこにはイギリスやアイルランドの人たちの心が読みとれる。

民俗学は十九世紀中頃からイギリスを中心  
に盛んになってきた学問で、今世紀に入  
ってからは学際的研究の導入により世界各  
国でさまざまな成果をおさめている学問で  
あるが、民俗学の中心資料の一つである民

間伝承は、今日では民俗学、言語学、文化  
人類学、心理学、社会学等々、さまざま  
な学問領域から収集・検討が加えられてい  
る。木村教授らの訳出された民話集の原  
著ジョゼフ・ジェイコブズは民俗学の今日  
の隆盛の基礎を築いたイギリス民俗学界の  
第一人者であった。

ここに訳出されたイギリスとケルト（ス  
コットランドの一部とアイルランドでゲー  
ル語が話されている地域）の民話は、原編  
者が序文で記しているように「民俗学の学  
問的価値をいささかも冒さない」程度に「言  
葉が子供たちに分かりにくすぎる場合に  
は、平易に」された、素朴で読みやすい文  
体で語られている。そして、目を楽しませ  
てくれるベッテンのこれまた素朴な挿絵が

そえられている。これらの民話のなかには、「ジャックと豆のつる」「三匹の子豚の物語」「親指トムの話」「猫の王様」「ジャックと仲間たち」「鳥たちの戦争」「黒い馬」「ラセット・ドッグ」「フィンが巨人の国へ行った話」などのように、わたしたちが子供の頃から馴染んでいる話も数多く含まれている。

お馴染みの「三匹の子豚の物語」の冒頭を引用してみよう。

昔、豚が歌を歌っていた頃、

猿がかみたばこをかんでいた頃、

めんどりが大夫になろうと、嗅ぎたば

こを嗅いでいた頃、

そして、あひるが、グワッ、グワッ、

グワッ、とわめいていた頃のこと。

一匹のおおさん豚が三匹の子豚を持つていたが、子豚を養ってゆけなくなったので、自分の幸せは自分で見つけるんだよ、といって外へ送りだした。……

このように訳文はこなれた文体で、朗読に適するように配慮されていて、訳者の労苦がうかがえる。



アイランドは民話の宝庫といわれるだけあって、物語の語り口もたくみなら、種類も豊富である。そのなかには、訳出はされていないが原編者が注で指摘しているように、わが国のごぶとりばなしに類似した民話もある。「ノックグラフトンの伝説」というのがそれで、類（または類）にこぶがあるのではなく、この民話ではこぶは背中にある。綽名をラズモアという男がいて、彼は藁やい草で帽子やかごを編むのがうまかった。あるとき、妖精たちのところへ連れて行かれ、妖精たちの歌う歌の続きを高く歌ってやったおかげで、こぶがとれる。それを知ったある老婆が知り合いのジャック・マドンというこぶのある男にもラズモアと同じようなことをやらせるが、狡猾なマドンは妖精たちの機嫌をそこね、ラズモアのこぶまでつけられてしまい、おまけに死ぬはめになるといふ話である。原編者はこの話は少なくとも十六世紀の終り頃までさかのぼれる話で、日本のごぶとりばなしはもつと後年日本に入ったものであるとしているが、日本の話は十三世紀はじめの『宇治拾遺物語』にも収められている

のだから、このへんのところは疑わしい。（しかし、門外漢のわたしには両者にどんな相互関係があるのかは分からない。）

ともかく、これら五冊の民話集はまことに楽しい読みもので、わたしたちはそれらを通してこれらの民話を語り伝える人たちの心のなかに入って行けるのである。アイランドの詩人で民話の収集にも力を注いだW・B・イエイツも「民話は単純さと音楽性に富んだもので、あらゆる出来事を：何世紀の間、変わることなく伝えてきた階層の人たちの文学であり、その人たちはあらゆることを心に深くしみこませていた、そして、その人たちにとってはあらゆるものが表象であった」と、述べている。

岩山太次郎（大学文学部教授）

加藤延雄著

『わたしと同志社』

一回顧八十年一

（加藤延雄先生遺稿集編集発行会）  
B6版三五七頁 一、〇〇〇円

白と紫の清楚な装幀の『わたしと同志社一回顧八十年』が、著者の加藤延雄先生逝

かれて半歳余にして、久永省一先生の御努力によって世に出た。一読して、今は亡き先生に再び出会うとともに、同志社の歴史そのものを見るような気がした。

父延年先生の同志社赴任に伴って、延雄少年は、

「相国寺の簷にかこまれ、烏丸通りに沿う土塀の内側に一本の柳の大木と二本のアカシアの大木が、西向いの大聖寺の松の大木と交互に枝を伸し合って握手していた」

ところの東側北寮の教師館に住む「二階のわたしたちの部屋から南を望むと、彰栄館の側面がま正面に見えた。時計台の大時計がよく見え、その文字板は今とちがつてディーグリーンで文字と大小の針は金色で、白、緑、金、赤いれんが色、実にすばらしい配色である。雪の積った朝なんか大変美しく見え、時鐘は美しく、また遠くまで鳴りびびいた」

と語って居られて、そこを生活の場とされた先生が、同志社の風物の中で成長をし、てゆかれる姿が、まるで映画のシーンのよ

うに魅ってくるのである。

先生は人生の出発に於いて、同志社と深く関わり、結びつき、それを人生の全てとされた。

それ故、この書には、先生の人生と、同志社の歴史とが渾然一体となって私どもを感動させるものがある。先生は恩師の諸先生を一人一人、愛敬の情をこめて描いて居られる。またチャペルでの説教者である牧師の方々の印象も仲々に鋭く捕えて居られる。その他学友、同僚、知人、先輩、後輩に至るまで、こまやかにその印象を綴って居られる。また同盟休校事件や、その他同志社学内の諸問題に触れられていて、或る意味で、同志社史の貴重な資料となるものが数少くない。とくに課外活動と、私とスポーツの項では、同志社のスポーツの発生、興隆とともに、それに活躍した人物が描かれ、これまた同志社スポーツ史に幾頁かが加えられるであろう。とくに現存する同志社の古建築。彰栄館、チャペル、理化学館、神学館、有終館等がその外観、内部構造の変化にまで及んで誌されている。

この書によって、人は、同志社とともに

生きた、誠実、謙遜深く、終始一貫して、クリスチャンとして、教師として、いわゆる同志社人として生きた一人の先輩の強烈な個性に触れられるであろうし、この書に描かれる多くの人物像や、同志社の行事風物の中に、古き、良きの時代の同志社の歴史の面影を見出されるにちがいないと思われる。

この説後感想の文を綴っているころ、同志社大学が明治を倒して、ラグビー学生選手権の王座を獲得する。この快挙を、元同大ラグビーの加藤先生は天上に在って、莞爾として笑み心から祝福の拍手を送って居られるであろう。

信楽健三(中学校教諭)

嶋田啓一郎編

### 『社会福祉の思想と理論』

―その国際性と日本的展開―

(ミネルヴァ書房 A5版  
三一〇頁 三七〇〇円)

一つの著作の公刊には、なんらかの必然性がなくては意味がない。情報化社会を映して洪水のような出版物ブームである。意味や必然性をたしかめようとしても、この

ブームの渦中にあるとはとまどいに終ってしまう。しかし本書にはくっきりとした必然性がある。編著書である嶋田啓一郎先生の定年退職をむかえ、先生の生涯の研究主題である、社会福祉の真の姿とは、一体何なのか、という問いに対し、先生を軸として、各研究者がそれぞれの視座と領域について、論証、究明を試みた集成である。社会福祉の研究領域、その理論についての成果はきわめて多彩である。戦後三〇余年の討究のなかで、ゆたかな蓄積があったが、嶋田先生は、その理論研究の系譜のなかに、ユニークな発言と位置を占めてこられた。

その背景には、半世紀を経た同志社の社会福祉研究の歴史、基盤、学統、先生のキリスト教信仰、新島襄の思想の継承と先生の人間的なるものへの強烈な関心と責務などが渾然と重合している。本書の巻頭には「社会福祉と科学的方法論」の論稿があるが、ここにも、現代を直視し、該博な論理による社会福祉論が展開され、とくに、価値と科学、経済体制と社会体制の力動的総合理論の構成と、先生の思想、その希求ともいべき全人的人間の統一的人格―アイ



デンティティをふくむ論証が展開されている。

嶋田論文を中心に、十人の研究論文によって本書は構成されている。さらに、先生のごつよい主張としての国際的視野と日本の特性の深い相関の解明などが各論稿のそれぞれに集約されている。主題を紹介するとⅠ部の社会福祉論の体系的展開では、「社会福祉の固有性と専門性」(岡村重夫(大阪社会事業短期大学学長))、「キリスト教と社会福祉思想」(阿部志郎・横須賀キリスト教社会館長)、Ⅱ部の社会福祉における国際性と日本の条件では「欧米における社会福祉の現代的展開と日本」(一番ヶ瀬康子(日本女子大学教授))、「福祉国家と福祉社会」(岡田藤太郎・神戸女学院大学教授)、「市民福祉の思想」(小倉襄二・同大教授)、「社会福祉の日本的性格」(住谷磐同大教授)、第Ⅲ部の社会福祉方法論―発展の条件では「日本におけるケースワークの再生」(大塚達雄・同大教授)、「グループワーク発展の社会的背景」(黒木保博・同大専任講師)、「地域福祉論の課題」(井岡勉・同大教授)、「社会福祉調査と政策」(井垣章二・同大教

授)となっている。本書のイメージとしては、それはモザイク模様にも似ていて、嶋田先生の「問い」に応じて、密接な協力・支持のなかで各論稿には独自の論証が提示されつつ、主題のしめすようにゆるやかな、理論と思想における共通のベースが形成されている。

現実の社会福祉の理論と実践は、大きな転型期にさしかかっている。この変革の意味を問い、一つの指標を提示したいという希いが本書にはひそんでいる。本書に集約された到達点から、嶋田先生の「問い」をさらに深め、たしかなものとするのが私たち先生につづくものの責務でもある。

小倉襄二(大学文学部教授)

